平成２９年度　有田町立有田中部小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
有田を愛し、夢や希望を持って、明るく元気に生きる児童を育成する。	①　教職員の資質を高め、児童の学力向上を図る。 ②　児童へのきめ細かな支援を行い、心の教育を充実する。 ③　望ましい生活習慣を身に付けさせ、心身の健康を育む。

達成度
A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

3　目標・評価

①教職員の資質を高め、児童の学力向上を図る。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○ 教職員の資質向上	・校内研究の推進 ・教師の授業力向上	・全職員で取組内容を共通理解して取り組むとともに、全クラスで実践的授業を実施する。 ・児童アンケートで、「授業が楽しい」の指標を85以上、保護者アンケートで「授業を工夫している」の指標を80以上にする。	・事前・事後の研究会も含め授業研究会に主体的に参加し、「楽しく意見を交流し合う授業」づくりに努める。 ・授業において、2人、3人、グループ、全体など必要に応じて話し合いの種類を適切に設定し、授業評価を行い、自身の授業力の向上を図る。 ・積極的に内外の研修会に参加し、自己の指導との比較を行いながら、指導技術の向上を図る。	A	・校内研究の内容変更で、外国語活動の研究に取り組んだ。各担任が授業研究会を中心に実践的指導力の向上に向けて、熱心に研修を重ねることができた。英語指導に関する指導技術が身に付いてきている。 ・児童も英語でのコミュニケーションを楽しむ姿が多くなってきており、授業を楽しみにしているという声が多数聞かれた。	・活動の充実に向けて、イングリッシュルームの設定、自作教具の作成などにも取り組んできたので、引き続き環境面の充実と指導技術の向上に努めていく。 ・授業研究会を中心に、具体的指導方法の工夫などについて職員間で研究し、全体的なレベルアップを図っていく。 ・講師招聘による研究会を開き、理論面の研究も深める。
教育活動	● 学力の向上	・個に応じた指導の充実による基礎学力の向上	・ＣＲＴで各学年の得点率平均を全国同等か、それを上回るようにする。 ・12月県調査では、各学年の平均を県同等か、それを上回るようにする。	・発問等を工夫したり、書く場面や説明する場面を効果的に授業に仕組んだりすることによって、児童の弱点である活用力の伸長を図る。 ・習熟度に応じた補充指導の在り方を模索し、具体化する。 ・読書タイムの在り方を検討し、ただ読むだけではなく、要約、感想、引用など書く活動との連結を模索し、具体化を図る。 ・家庭学習の充実を図るため、活用問題も含めた効果的な課題の与え方やノート記述の好例の掲示の仕方を工夫する。	C	・ＣＲＴでは、1，3年の算数で全国平均を下回ったが、それ以外の学年の算数、全学年の国語では全国平均同等かそれを上回った。 ・県学習状況調査では、6年の社会と理科で県平均を下回ったが、6年の他教科と4，5年の全教科では県平均同等かそれを上回った。 ・算数では、知識・理解、数学的な考え方、社会・理科では、思考・判断・表現、知識・理解に課題が残った。	・論理的に表現するために、表現の仕方をスキルとして身に付けさせる。 ・基礎的・基本的な内容に関しては、既習事項と関連させたり思い出したりする機会を増やし、繰り返し声に出させて定着を図っていく。 ・「見通し」の過程で条件を整理する力、「自力解決」・「練り合い」の中で思考を表現する力を身に付けることができるような「学び合い」の授業を展開する。
	◎ 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	・「分かる授業」「楽しい授業」づくりの推進	・授業において、黒板での情報提示、教師の発話による情報提示、IWBでの情報提示を区別し、最も有効な方法の選択能力を高める。	・提示する情報の質を保証する方法と効果的な提示方法について、常に考えながら授業を構成する。 ・機器操作の研修だけではなく、情報の質と提示方法に関する実のある研修を年間数回実施する。	B	・IWBの利用に慣れ、デジタル教科書を授業に生かすことができた。タブレットの利用については、もう少し幅広く活用できるように推進していく必要がある。 ・児童の94%が、「パソコンやテレビを使った授業は楽しく、分かりやすい」と肯定的に捉えている。 ・情報モラルについては、児童・保護者を対象とした外部講師による講座を実施したが、情報機器の活用では様々な社会的問題も起きているので、継続指導が必要である。	・今年度は、校内での機器活用研修が十分に取れなかったので、研修の内容等を工夫しながら指導力向上につながる取組を推進する必要がある。また、学年間での指導方法の交流などを通じたOJTの充実を図っていく。 ・情報モラルについては、道徳・学級活動・総合的な学習の時間等において、様々な問題と関連付けた指導を意識的に行っていく。
学校運営	○ 開かれた学校づくり	・地域と連携した体験活動の推進	・地域の人材を活用した体験活動を通して、地域との連携を進める。	・教育活動に地域人材を活用し、地域のよさを体感させる。 ・体験活動で得た知識・技能をはじめ、身に付けた能力を発揮できる場の工夫などを行っていく。	B	・地域人材、有田工業高校の協力で、焼き物の形成と釉薬かけなどの体験を行うことができた。ＰＴＡと協力し、窯元見学やごどうふづくり体験等も行うことができた。 ・総合的な学習の時間のまとめや、集会での発表などで表現に工夫が見られるようになるとともに、積極性も出てきている。	・地域の人材バンク等も積極的に活用しながら、焼き物はもちろん、その他の分野も含め地域ならではの体験ができるようにしていく。 ・体験活動で学んだことを、外部に広報する活動なども積極的に行い、連携を深めていく。
		・積極的な情報発信	・保護者アンケートで「学校の教育方針・内容を概ね知っている」の指標を80以上にする。	・学校便り、学校メール、ホームページ、各種会合等の機会をとらえ、情報発信の機会を増やす。	B	・校長による学校だよりの発行を積極的に行った。その結果、子どもたちの様子や学校の取組がよく分かって非常によかったという声を多数もらった。 ・教育方針・内容の認知に関する指標は66で、目標に届かなかった。教育方針の周知に力を入れていく必要がある。	・様々な機会をとらえながら、引き続き積極的に学校の様子などを伝えていく。 ・教育方針等は、年度当初はもちろん、ＰＴＡの会議や懇談会などでも折に触れて伝え、理解と協力を得られるような働きかけを行っていく。

②児童へのきめ細かな支援を行い、心の教育を充実する。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	● 心の教育	・いのちの教育、人権教育の充実	・児童アンケート「学校が楽しいですか」で、「とてもそう思う」の割合を75%以上とする。 ・保護者アンケート「お子さんは、『学校が楽しい』と感じていると思いますか。」で、「とてもそう思う」の割合を50%以上とする。	・道徳の授業の充実を図り、「いのちの教育」「人権教育」の充実を図る。 ・週に一回、「気にしたい子の共通理解」を行い、特に大きな課題を抱える子供については、個別に解決策を探る。 ・Ｑ－Ｕアンケートの結果に基づき、年2回の研修を行う中で、「いのちの教育」「人権教育」とも関連させながら取組を検討していく。	B	・児童アンケート結果は60%、保護者アンケート結果は46%で、いずれも目標まで届かなかった。 ・平和集会や人権週間をとおして、お互いを認め合い、大切にする意識を高めることができた。 ・Ｑ－Ｕに関する研修会は、気にしたい子を職員全体で見つめるきっかけとなった。	・気にしたい子について共通理解するだけでなく、問題解決につながるように、組織の在り方も見直す。 ・年間を通して、人権意識が継続するように委員会活動や学級活動等の取組とリンクさせる。
	○ 生徒指導・教育相談	・規律ある学校生活の確立	・学校のきまりや社会のルールを守るようにする。特に、本年度は元気な挨拶ができるよう指導を強化する。	・廊下歩行、トイレのスリッパ並べ、無言掃除などについて、全校集会や学年集会で常に意識付けを行う。また、全職員で臨場指導を行い、委員会活動等で児童の自己啓発を促す。	B	・朝の挨拶は、ずいぶん声が出るようになった。次年度は、自分から進んで挨拶する習慣を付けさせたい。 ・廊下歩行、トイレのスリッパ並べは、今後も強く指導を続けていく。	・2校時後の15分休みに、ふれあいホール、図書室前など、廊下を走る児童が多い場所を重点的に、臨場指導する。
		・教育相談の充実	・児童アンケートで、「悩みがあったとき、相談する友だちや先生がいる」の指標を85以上にする。 ・相談内容を的確に把握し、ＳＣとの面談や専門家との相談につなげるなど、連絡・調整の機能を適切に果たす。	・児童や保護者が気軽に相談できるよう、お便り等での情報発信を増やす。 ・月末に一か月間の気持ちを振り返る「月のこころ」を実施し、日頃から気持ちを素直に表現することや困った時には相談してみるという雰囲気づくりにも努める。 ・相談担当者が担任との情報交換や校内巡視の機会を増やして、児童理解に努める。	B	・指標は75で目標に届かなかった。相談しやすい環境づくりに努めたい。 ・不登校児童に対して、もっと早く教育相談や心療内科受診を勧めていればよかったと感じられる事例があった。 ・相談がすぐに必要な児童や相談の継続が必要な児童のことを常に頭に入れ計画を立てた。	・教育相談を希望する児童ばかりでなく、日常生活や担任の先生との会話の中などで気になる児童の家庭にも教育相談を勧めるなどしていきたい（早期対応）。 ・気になる児童には、適切な言葉かけや対応ができるよう児童理解に努めていきたい。
	● いじめの問題への対応	・いじめの早期発見・早期対応に向けた体制づくり	・保護者アンケート「学校は、いじめ防止に向けた取組を適切に実施しているか」で、肯定的回答の割合を75%以上とする。	・いじめに関するアンケート、教育相談週間を実施し、状況把握を適宜行っていく。 ・月末に一か月間の気持ちを振り返る「月のこころ」を実施し、人間関係での悩み等をできるだけ早い段階で掴んでいくようにする。 ・人間関係作りに効果的な体験活動を取り入れるなど、いじめ根絶に向けた取組を進めていく。	B	・指標としたアンケートの結果は93.5%で、目標を達成できたが、「とてもそう思う」の割合は19.9%と低かった。今後の課題である。 ・本年度も数件のいじめが発生した。発生率は低いが、いじめで嫌な思いをしている子がいることをしっかり受け止め、いじめ防止対策に力を入れていく。	・毎月、その月の気持ちを振り返るアンケートを実施し、担任のみでなく担当者及び管理職も目を通して、共通理解を図っていく。 ・開発的生徒指導と言われる人間関係作り、コミュニケーション力の育成、人権教育を全校で取り組んで行く。
	○ 特別支援教育	・校内支援体制の充実	・児童一人一人の教育的ニーズに応じた指導及び支援に努める。	・5月と2月にｱﾝｹｰﾄを実施するとともに、検査や参観等で支援を必要としている児童を把握する。 ・昨年度、「要支援」として名前の挙がっていた児童について、今年度の変容を探り、今後の支援について検討する。 ・個別の教育支援計画、指導計画の作成及び活用を進める。	B	・5月に行ったアンケートを集約し、8月、全職員で気にしたい子の共通理解を図ることができた。 ・4人の支援員の配置については、毎週、時間割を作成し、主に1年生、愛育学級の児童の交流、そして気にしたい子に挙がった児童の授業に入ってもらった。支援の要望が多くて重なり、支援できない場合があったことが課題である。	・児童の変容を調べるアンケートの回数を増やし（10月、2月など）、個別の教育支援計画及び指導計画について、年度途中で目を通す機会を設け、支援員配置について年度途中に検討する。 ・2月には、気にしたい子のアンケートを実施したので、新年度の支援に生かしていきたい。

③望ましい生活習慣を身に付けさせ、心身の健康を育む。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	● 健康・体づくり	・児童の体力向上 ・望ましい生活習慣の形成	・体育的行事に「進んで楽しく参加している」児童の割合を増やす。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」を奨励し、保護者アンケートの結果で、肯定的回答の割合を90%以上にする。	・持久走やなわとび月間等を設定するとともに、「外遊び」を励行し、楽しく体を動かす機会を増やす。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」についての児童の自己チェック週間を年間2回実施し、意識付けを図るとともに、保護者への啓発を行う。 ・規則正しい生活習慣の大切さを学級活動で指導する。	B	・年度初めの計画に沿って取組を進めたものの、進んで楽しく参加している児童の割合は、現状維持であった。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」の推奨はできているが、保護者アンケートの肯定的回答は80%であった。計画に基づき取組を進めているものの、目標にはやや届かなかった。	・持久走・なわとび月間等の設定を行うとともに、学級全体や異学年との外遊びを設けるようにする。 ・「早寝・早起き・朝ごはん」の推奨とともに、個別の指導を行う。自己チェック週間を全校に呼びかける。
	○ 低学年の学習環境の改善・充実	・低学年の基本的な学習・生活習慣の育成	・「あいさつ・返事をきちんとする」「立腰でよい姿勢ができる」の定着を図る。	・全校での共通した「生活のめあて」として具体的に取り上げながら、継続して指導していく。 ・「有田っ子スタイル」を活用して、基本的な内容を統一して指導していく。	B	・あいさつ・返事は、言われればできるという状況なので、進んで行うことができるように、引き続き指導していく必要がある。 ・授業の初めと終わりの挨拶の際には、「立腰」と声をかけて、姿勢を意識させた。徐々によくなってきている。	・あいさつや返事については、そのことの重要性を説き臨場指導するとともに、登校時の気持ちの在り様などにも心を配った指導を行っていく。 ・「立腰」については、集会などでの指導を中心に全校で取り組んで行く。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

・全体的な評価結果として、「概ね達成」が多く一定の成果は上げられていると考える。ただ、保護者や児童、職員に質問したアンケートでも、「概ねよい」という趣旨の回答が多いので、十分な効果が挙げられるような取組の工夫を行っていく必要がある。また、保護者や児童がどういうニーズを持っているのかもきちんと把握しながら、効果的でタイムリーな指導ができるようにしていきたい。
・学力向上については、本校の最重要課題である。学年間で目標達成の度合いは異なっているが、全校で一体となって質の高い学力を身に付けられるようにしていく必要がある。特に、思考・表現については、他の領域に比べて低い傾向が続いているので、具体的な対策を各学年ごとに立て、実践化を図っていくことが重要であると考える。
・校内研究で取り組んでいる外国語活動の指導方法の研究については、各担任と外部講師が連携し、基本的な授業の進め方などについて共通理解を深めて実践化できるなど、一定の効果を上げることができている。来年度は、研究発表会も開催するので、さらに研究を重ねながら、他校のモデルとなるような授業等の提案ができるように職員一丸となって取り組んで行きたい。

●は必須項目、◎は特定課題、○は独自評価項目